

ぬいぐるみという記号から コミュニケーション主体を捉え直す

宮脇 かおり（桃山学院大学）

コミュニケーション研究では、コミュニケーションを行う主体（＝人間）がまず存在し、その人間が自ら戦略的に他者とのコミュニケーション方法を選択していくという前提の元に様々な研究が行われてきた。しかしこうした人間中心主義は人が人を動かすプロセスに注目するあまり、個々人を取り巻く権力作用を見逃してしまい、さらには我々が記号を使うと同時に記号に使われていることに盲目になってしまう（板場 20-21）。ここから脱却する為、コミュニケーションを人間と記号、さらには記号同士の関係性として捉えてみたい。

「主体は常に人間である」という前提を脱構築し、コミュニケーションを記号という観点から捉え直す為、本発表は人とモノ（記号）とのコミュニケーションが生起する場としてのぬいぐるみに着目する。ぬいぐるみというシニフィアンには「幼児のおもちゃ」というシニフィエが結びつきがちであるが、青年期以降のぬいぐるみ遊びは「自他二重性（外言）の豊富化にともない、自分の内側に確立した内なる他者が外の世界に抛り代にむけて投影されたもの」であり、何ら異常なことではない（中井・堀本 100）。ぬいぐるみは生命を持たない単なる布と綿の集合体であり、ぬいぐるみからの返事はすべて所有者の独り言である。しかし、ぬいぐるみがそこに「存在」するからこそ紡ぎ出されることばや感情がある。こうしたぬいぐるみの持つ特性は、コミュニケーションは人間同士で行うという前提を捉え直すヒントとなり得る。

『ユリイカ』2021 年 1 月号は「ぬいぐるみの世界」という特集を組み、ぬいぐるみ所有者たちの心象、ぬいぐるみ病院、ぬい撮りといった現象を紹介している。本発表では『ユリイカ』の特集で集められた 41 名のぬいぐるみ愛好家たちのことばや感覚を整理し、従来のコミュニケーション研究から抜け落ちてきたものを可視化してみたい。

さらに、表象文化論研究者である小澤は人形とぬいぐるみを対比し、「人形はロゴスを呼び寄せるが…ぬいぐるみは言語以前もしくは言語の外部に置かれている」（小澤 232）として、ぬいぐるみが記号の枠組みの外を垣間見る装置となり得ることを提示している。ぬいぐるみ愛好家の多くが、特定のぬいぐるみに無意識に引き寄せられる、ことばでは説明できない何か、お迎えする運命、等という表現でぬいぐるみとの関係性を表現している。こういった言説は従来の論理学では「非科学的」「妄想」であるとして切り捨てられてきた。人とぬいぐるみのコミュニケーションを読み解く中で、こうした記号の外にある感覚についても考察を行う。

参考文献

- 小澤京子「ぬいぐるみの存在論と様式論」『ユリイカ 2021 年 1 月号』青土社
板場良久「コミュニケーション学を学ぶことの意義」板場良久・池田理知子編著『よくわかるコミュニケーション学』ミネルヴァ書房 2010.
中井孝章・堀本真衣『ぬいぐるみ遊び研究の分水嶺』大阪公立大学共同出版会 2016.